

エルンスト・トラー 「劇作家の作品について」¹⁾

Ernst Toller : « Vom Werk des Dramatikers » (1934)

本会議の初日、みなさんがソヴィエト文学の成果や諸問題について自説を縷々述べておられるあいだ、私はといえば、汽船ルイコフ号の船上にいたのです。レーニン・コーナーの片隅に陣取り、みなさんの心をも捉えて離さぬもの、つまりは文学の問題をめぐる、水夫やボイラーマンたちとの会話に没頭しておりました。甲板やボイラー室での作業によって煤けて黒くなった顔の男たち、西側で言うところの市井のプロレタリアたちが、私の向かいに座ってロシアの古典や世界文学について書物談義をするのです。プーシキンやレオ・トルストイ、ゴーゴリやチェーホフはもちろん、ゴーリキー、パステルナーク、エレンブルグ、さらにはトレチャコフやフェージン、ショーロホフ、チーホノフなどの名前が登場しました。ディケンズ、バルザック、ウェルズやアンドレ・ジッドも、彼らは読んでいました。世界初の労働者共和国の偉大なる創造力、文化構想力が、私の目の前で生き生きと実現されていたのです。こんな男たちは、この地のほかにはどこを探したって見つからないでしょう。

レニングラードに降り立ち、仕事の律動を、町や地方に鉄が入り新たな建設が進むその力強い息吹を感じとり、はじめて訪れた1926年以降にソヴィエト連邦がなした大きな飛躍を目の当たりにしたとき、今日ヒトラー・ファシズム政権下で非道のもとに暮らし苦しむドイツの大衆とともにこの様子を目にし得たなら、という思いが湧きあがってきました。同志諸兄、諸兄はみずから生み出したこの成果を誇りにしてよいと思います。そして、民族主義・国粋主義を憎み、息の続く限り追及し闘うつもりであるわれわれ作家たちも、諸兄とともに誇らしい気持ちを抱きたいと思います。

諸兄への非難は自由を獲得しつつある人間たるわれわれすべてへの非難と同義であり、現在そして未来において諸兄が守りゆくものを守ることこそわれわれの責務であると、数年来私は承知しています。だからこそ、けしてあら探しというのではなく、ひとりの同志として、いくつか批判的な言葉を述べるのを、お許しいただきたいの

です。劇作家として話をいたしましょう。わたしの手元には、今年の演劇祭週間のプログラムがあります。そこにはデュマの『椿姫』やグツコーの『ウーリエル・アコスタ』などといった作品の名前はあれど、ソヴィエトの若い作家の作品は、ごくわずかしきありません。

このプログラムは、諸兄の多彩な生のありかたを示していません。この演劇祭は、ソヴィエトの若い劇作家たちの作品が持つ豊かなイメージを、外来の観客にいささかも伝えていません。この国の若き劇作家たちの作品はどこに行ってしまったのでしょうか？ 他国の資本主義的劇場があえて舞台にのせようとせぬ外国作家の作品は、どこにあるのでしょうか？

西の作家の抱く問題意識と諸兄のそれは異なっている、それは確かです。諸兄が試みているのは、「新しい生」という課題に形を与えることでしょう。幾年もの窮乏、勇敢なる苦行の末に、諸兄は個人の生というものをいわば新たに発見し直したのです。近年の戯曲が「美しい生」なり「個人的な生」なりといった題名を持っているのも、ゆえなきことではありません。階級のない社会を基盤としつつ、婚姻や愛、母といった古くからの問いに新たな形で取り組もうとしています。

資本主義の国に生きる作家として、われわれはそれとは異なる課題、異なるテーマ、異なる形式を持っています。ドイツには表現主義にはじまりプロレタリア的集団演劇にいたる種々様々な形の革命的演劇が存在します。そして労働者は、芸術としてすぐれているならば、表現主義的な作品でさえその意味を汲み取ってきたのです。労働者階層の芸術に対する理解力を、その想像力を、過小評価してはなりません。そのうちの多くの作品が世界中で上演され、かつ多くの国の革命的劇文学にとって画期をなすものともなりました。今日では誹謗的となっている表現主義も、その盛期には変革をもたらす役割をたしかに果たしていたのです。

表現主義は新即物主義に取って代わられます。新即物主義が標榜するルポルタージュ劇の功績は新たな社会的素材を集めたことですが、しかしその新素材から芸術を

1) [訳注] 初出 : *Internationale Literatur*, 5/1934, Moskau. 翻訳に際しては以下を底本とした。 *Zur Tradition der sozialistischen Literatur in Deutschland. Eine Auswahl von Dokumenten*. Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar, 1967.

作り出す力はありませんでした。そしてドイツの演劇は、革命主義的理念と現実とのジレンマから、革命的リアリズムを生み出します。

ブルジョア批評家は、そのような戯曲を政治的意図があらわな傾向芸術だと非難しました。しかし彼らはなにをもって政治的「傾向」がないとするのか？ その批判の背後にあるのは、現にある資本主義の権力構造を知のレベルで正当化する類いの、利害関係、ものの見方、認識の集合体です。芸術家にとって傾いてはならぬ形式とはただひとつ、一方を悪魔として、もう一方を天使として人間を描くような、勧善懲悪の描写だけでしょう。

芸術家はテーゼを抽象的に説明するのではなく、それに具体性や人間像、形姿を与えねばなりません。偉大な芸術作品の多くは政治的な創作物ですが、政治的作品というとき、文学的手法を用いたプロパガンダと取り違えてはならないのです。プロパガンダはもっぱら現下の目的に奉仕します。それは文学の範囲を超えるものであり、かつ文学の高みに届きません。前者とはつまり、その効果の極限では聴衆を直接的行動に駆り立てる可能性を秘めるということであり、後者はすなわち、文芸作品の達する本質の深みを測り得ない、ということです。

諸兄の喜びはわれわれの喜びでもあります。そしてわれわれの懸念は諸兄の懸念ともなるはずです。われわれは諸兄から学ぼうと努めていますが、同様に諸兄も我々に学ばねばならないのです。われわれには諸兄の助けが必要です。みずからの国を追われ生きる場を失いつつある作家たちは、とりわけ助力を求めています。諸兄のなした革命に歓迎の意を述べるとともに、ファシズムと勇猛果敢に闘う芸術家たちに門戸を開いておくことが重要だ、とも言い添えておきたいのです。たとえ彼らの作品が、諸兄の設定したイデオロギー的要求を完全には満たしていないとしても、です。なぜなら、彼らの作品はプロレタリア芸術がほとんど浸透することのないブルジョ

ア階層や知的階級、あるいはいくばくかの若者を、その手に掴んでいるのですから。その作品は、空虚や絶望を、ブルジョア社会の疲弊を描写し、世界を認識する力の覚醒を促します。そして同時に、新たな世界を拓くものでもあります。ハインリヒ・マンやドス・パソス、シンクレア・ルイスといった作家は、偉大な思想家として革命を導く力を持っています。作品のもつ革命的精神というものは、しばしばそれを生み出した者が予感すらしなかった効果を発揮するのです。

あとひとつだけ付け加えてもよいでしょうか。みなさんはあらゆる機会を捉え、外国でみずからの生や作品の証しを立てていただきたい。国の外に出て、ブルジョア作家たちの会議に出向いていただきたい。みなさんが国際的な場において登壇すること、それが重要なのです。現実としての生に大きく豊かな意味を与えんとする世界を、開拓し作り上げつつある者として……。

しかしまた、みなさんが西側にある諸問題を詳細に検討し、西の人間たちを真に理解することも重要です。決して図式化には陥らぬよう。みなさんはロシアの人間を図式的に捉えることを認めませんでした。西の人間を図式化することも同じく断固としてはねのけてください。

私はみなさんと共にあります。そして、われわれが深い悲しみと怒りを感じつつその姿を思い起こしているのに、それを知ることすら許されぬ、すべての獄中にある仲間たちと共にあります。われわれは彼らを忘れません。われわれは決して沈黙しません。

われわれは亡命生活にあっても疲弊などしません。けしてくじけぬという思いを胸にわれわれはドイツを離れたのです、われらが信ずるドイツ、苦しみつつも闘争を内に秘め、あらゆる苦難をこえて明日の勝利を確信する、あのドイツを！

(訳：本田雅也)